

P-111

保育所看護職の保健活動に関する 国内文献の検討 -保育保健業務の活動領域作成後の現状-

藤田 千春¹、竹中香名子²、谷山 牧³、小林 佳寛¹¹杏林大学保健学部²愛知学院大学健康科学部 健康科学科³国際医療福祉大学 小田原保健医療学部

【目的】

子育て支援の充実化に伴う保育所の増加、さらには子どもの健やかな育ちの保証のために、保育保健業務の活動領域が作成され、保育所看護職（以下、看護職とする）が保健活動に携わっている。今後の看護職の専門性の発揮や子どもの多様な健康状態の支援に向けて、近年の保健活動に関する研究動向を明らかにすることを目的に文献検討を行った。

【方法】

文献検索は医学中央雑誌WEB、CiNiiを用いて、2014年から2023年迄の文献検索を行った。キーワード検索は「保育所看護職」and「保健活動」、「保育所看護職」and「保健業務」とした。会議録と解説を除いた研究論文は42件得られた。重複と文献研究を除いた後、看護職の保健活動に関する記述がある研究論文14文献を分析対象とした。これらの文献を子どもへの保健活動と子どもの保健につながる活動に分類し、内容を把握した。

【結果】

文献の発行は2020年に3件、次いで2014年、2017年、2021年、2022年に2件ずつ見られた。研究デザインは質的研究が8件、量的研究が4件、混合研究が2件であった。子どもの保健活動については、「療養生活支援に関わるもの」が4件みられた。中でも医療的ケア児の支援に関するものが複数あり、他には慢性疾患をもつ子ども支援、アナフィラキシーショック対応に関するものが調査されていた。さらに「情緒面等が気になる子に対する関わり」が1件あった。子どもの保健につながる活動では、「疾病の予防・防止に関わるもの」が2件みられ、COVID-19拡大防止対策や予防活動に着目したものがあった。また、「看護職が認知している保健活動や学習ニーズ」に関するものが6件あり、看護職業務の現状や保健活動に必要な能力を見たもの、保健活動に向けた学習ニーズの把握したもの等があった。臨床経験のある看護職による「保健職務上の困難感と対処」の文献も1件あった。

【考察】

子どもに対する看護職の保健活動は、健康な子どもの対応だけでなく、療養行動の支援にも対応していることが明らかになった。また、臨床経験を経て保育所看護職に就く看護職者の困難感軽減のために保育施設内で活用できるアレルギーの対処や医療的ケアについて継続的な学びができるよう支援する必要性が考えられた。本研究は科研費（21K10832）の助成を受けた。

P-112

栃木県内の大学附属病院における小児・AYA世代がん患者の実態調査

田村 敦子¹、森 早矢香²、黒田 光恵³、築瀬 順子³、五味 玲⁵、嶋田 明⁴¹自治医科大学 看護学部 ²自治医科大学附属病院³自治医科大学附属病院 とちぎ子ども医療センター⁴自治医科大学 とちぎ子ども医療センター 小児科⁵自治医科大学 とちぎ子ども医療センター 小児脳神経外科

I. 研究目的

当院の小児・AYA世代のがん罹患数と治療状況の実態を明らかにする。

II. 研究方法

A. データ収集期間：2023年8月から9月

B. データ収集方法：2006年～2019年に、当院でがん治療を受けた0歳以上～40歳未満で発症した小児・AYA世代がん患者を対象として、がん種、がんの部位、年齢、性別、治療法を電子カルテの情報から調査した。

C. 分析方法：得られたデータから記述統計を行った。がんの部位に関しては、小児がん国際分類第3版（ICCC-3）を参考にして分類を行った。

D. 倫理的配慮

自治医科大学臨床倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：臨大22-200）。

III. 結果

2006年～2019年に当院でがん治療を受けた0歳以上40歳未満の数は、2,628名であった。内訳は、0歳～14歳は317名（女性132名、男性185名）、15～29歳は617名（女性370名、男性246名）、30～40歳未満は1,694名（女性1,215名、男性479名）であった。

0歳～14歳の部位別患者数は、男女ともに、脳・中枢神経が最も多く、ついで白血病が多かった。15歳～29歳の女性の部位別患者数は、子宮頸部、3.5%、脳・中枢神経系2.9%、白血病1.9%、卵巣腫瘍1.8%、甲状腺1.3%、乳房1.3%などであった。15歳～29歳の男性の部位別患者数は、白血病2.6%、精巣腫瘍1.9%、脳・中枢神経1.8%などであった。30～40歳未満の女性の部位別患者数は、子宮頸部15.5%、乳房11.7%などであり、子宮頸部および乳房のがんの順に最も多かった。30～40歳未満の男性の部位別患者数は、脳・中枢神経系2.9%、白血病2.4%、悪性リンパ腫1.9%など、がん種が様々であり、小児がんと同様に脳・中枢神経系、白血病の順番で多かった。

IV. 考察

全国の調査から、0～14歳のがん種では、全国では白血病が男女合わせて全体の38%を占め、脳腫瘍が16%を占めている。しかし、当院では、0～14歳のがん種で最も多いのは、男女ともに脳・中枢神経系が最も多いという傾向が見られた。栃木県の報告では全国と同様の傾向がみられることから、栃木県内において当院が脳腫瘍の患者の受け入れを多く担っていることが推測された。